京都府埋蔵文化財情報

第121号

平成 24 年度京都府内の発掘調査成果とその周辺	小池	寛 1	
遺跡抄報 女谷・荒坂横穴群第13次の発掘調査	奈良原	建正 9	
遺跡抄報 聚楽第跡の発掘調査	岩松	保 13	
平成 24 年度発掘調査略報		17	
11. 植物園北遺跡			
12. 下水主遺跡第1次・水主神社東遺跡第2次			
13. 下水主遺跡第2次・水主神社東遺跡第3次			
14. 松井横穴群第2次			
長岡京跡調査だより・117		25	
資料紹介 山崎津跡から出土した頭蓋骨について佐藤勇雄・中務真人	・小池	寛27	
普及啓発事業		29	
組織および職員一覧		30	
センターの動向			

2013年8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

平成24年度京都府内の発掘調査成果と その周辺

小池 寛

平成24年度は、当調査研究センターにおいて新名神高速道路整備事業に伴う大規模調査ほか、15件28遺跡の発掘調査が実施され、その地域や時代を検討する上で重要な調査成果が相次ぎました。特に、全国的に注目された調査成果として、京都市上京区で発見された聚楽第本丸の石垣(巻頭図版)の調査をあげることができます。聚楽第は周辺の地形や町名、そして、何よりも小規模な発掘調査や立会調査で得られたデータを丹念に積み重ねた結果、徹底的に破壊されたとされる聚楽第そのものの構造的研究が進展しており、今回の石垣の発見につながりました。大規模調査もさることながら小規模調査の重要性を認識できた調査であったと言えます。

本稿では、平成24年度の主要な発掘調査について、概観することを目的としていますが、発掘 調査のみならず文化財保護に関連する内容についてもふれながら、一年間を地域毎に振り返って みることにしましょう。

〈丹後地域〉

与謝野町石田城跡・由里1・2号墳の発掘調査を行いました。古墳時代前半期のもので、墳丘は石田城跡の造営によって削平されていましたが、箱式石棺墓と木棺墓の埋葬施設を確認しまし



写真1 与謝野町由里1号墳 石棺近景(東から)



写真2 与謝野町石田城跡堀切の状況(東から)

た。箱式石棺では、2体の被葬者が頭位を西・東にそれぞれ替えて埋葬されていました。また、古墳を削平して築かれた石田城跡は連郭式山城で、曲輪、堀切などを確認しました。残念ながら出土遺物は極僅かでしたが、堀切の底部から石仏が出土しており、戦国時代の山城の調査事例を新たに追加できました(当センター)。

〈中丹・南丹地域〉

京丹波町**蒲生野古墳群**で櫛歯文と鋸歯文が施された直径11.6cmの西日本最大級の石釧が出土するとともに、鏡、装身具などが出土しました。古墳は、台地の縁辺部に位置しており、古墳から周辺一帯を広く見渡すことができます。出土遺物から古墳時代前期にヤマト政権との関係をもった被葬者像が想定されます(京丹波町教育委員会)。

弥生時代前期で多重の環濠を巡らせた環濠集落である亀岡市太田遺跡では、集落の東端で幅 1.3~2.3mの溝を3条確認したほか、環濠内で方形周溝墓と思われる溝や土坑、柱穴などが見つ かりました。今まで想定されていた環濠集落の構造に新たな要素が加えられるとともに、集落構 造自体についての研究が待たれます(亀岡市教育委員会)。

平安時代に平安京をはじめ、北九州の鴻臚館などに須恵器を供給した亀岡市**篠窯跡群**において、 分布調査の結果、白鳳期に比定できる窯が新たに確認されました。窯跡群の操業開始時期を考え るうえで重要な発見となったばかりでなく、窯が築かれた要因が、今までは、丹波国府などに供 給する目的が想定されてきましたが、時期的に篠窯跡群に近い観音芝廃寺などに供給する目的で 築窯されはじめたことが明らかになってきました(立命館大学・大阪大学)。

〈京都市域〉

京都市中京区京都地方気象台構内で平安時代初期につくられた運河「西堀川」を確認しました。 運河は、度重なる氾濫によって堆積した土砂で埋没していました。なお、豊臣秀吉が、この氾濫により堆積した土砂を基層として構築した御土居も確認されました(京都市埋蔵文化財研究所)。

平安時代の貴族である藤原良相邸である「百花亭跡」(平安京右京三条一坊六町跡)で平成23年度に出土した9世紀後半の土師器皿などの外表面に、国内最古と見られる平仮名の文字が確認されました。従来、紀貫之がかいた『土佐日記』が成立する10世紀ごろに平仮名が確立されたと考えられており、平仮名の変遷過程とともに平安時代の貴族が作り上げた文学などを解明するうえ

でも非常に重要な調査成果となりました。なお、京都市考古資料館での速報展には連日、多くの見学者が来館しました(京都市埋蔵文化財研究所)。

近畿圏内で最大規模を有する 集落遺跡である京都市左京区 植物園北遺跡において、奈良 時代から平安時代前期にかけて の竪穴建物10基や30棟の掘立柱 建物などを確認しました。特に、 2間×5間の身舎の3面に廂を もつ掘立柱建物は、平安京外の



写真3 京都市植物園北遺跡全景(南西から)

検出例としては希有な事例となります。また、この調査では近世の河川である乙井川の旧流路が確認されました。この流路によって上賀茂村と下鴨村が区画されていたことが古地図から明らかになっており、村界の地形や諸施設の状況が把握されました(当センター)。

世界遺産である京都市南区東寺の築地塀の調査で、文禄 5 (1596)年の慶長伏見地震で倒壊した とされる築地塀が、江戸時代前期には再建されていたことが、築地塀の垂直断面の詳細な観察か ら明らかになりました(京都市埋蔵文化財研究所)。

京都市山科区山科本願寺跡では、15世紀に比定できる風呂遺構が確認されました。また、それに連接するように蒸し風呂の石組みも確認されました。同寺での主要施設が集中する区域の特定につながる発見となりました。同じ構造をもつ風呂遺構についての基礎資料を提示した重要な調査事例となりました(京都市埋蔵文化財研究所)。

平安京跡の京都市中京区**新町通蛸薬師**の調査において、室町時代の麹を育てる石室などの酒造 関係の遺構が確認されました(関西文化財調査会)。

〈乙訓地域〉

向日丘陵における出現期の前方後方墳である向日市**元稲荷古墳**では、前方部の南裾部や東裾部が確認されました(向日市埋蔵文化財センター)。

また、同市と京都市にまたがる**寺戸大塚古墳**では、前方部の形状が長方形ではなく、「ハ」字形に広がることがわかりました(京都市埋蔵文化財研究所)。向日丘陵に築造された首長系譜をひく両古墳ですが、各々、異なる施工方法によって築造されることが明らかになりました。なお、両古墳の報道発表および現地説明会が、機関の連携により同日に開催されました。見学していただく方々の立場にたった現地説明会のあり方を考えるうえで、参考になる事例となりました。

大山崎町白味才遺跡で古墳時代末期から飛鳥時代に築造された横穴式石室が調査され、白味才

西古墳と命名されました(大山崎町教育委員会)。

長岡京市宇津文志 1号墳から出土した金箔を挟み込んだ重層ガラス玉の蛍光 X 線分析を行った 奈良文化財研究所は、古代ローマガラスと成分が一致することを明らかにしました。重層ガラス 玉としては、国内最古級の確認となりました。今後、中国や朝鮮半島などの東アジア圏の中での 解釈が必要となりそうです(長岡京市埋蔵文化財センター)。

国史跡長岡宮小安殿跡の調査で、礎石の据え付け穴の直下で、それより一回り大きい穴を掘削後、地固しながら埋めていることが判明しました。宮域の中心的建物の基礎構造が判明するとともに、後期難波宮の地覆石の溝幅と一致することから長岡宮が後期難波宮を移築して造営されたことが改めて裏付けられました(向日市埋蔵文化財センター)。

〈南山城地域〉

昭和38年に発掘調査が実施された城陽市**青塚古墳**出土の160点にも及ぶ埴輪の詳細を記述した報告書が刊行されました。南山城地域における首長墓である同市芭蕉塚古墳と同一工人によって生産されたことが判明しました。今後、南山城地域における首長墓系譜を考えるうえでの基礎的報告書です(城陽市教育委員会)。

京田辺市**口仲谷古墳群**で、後期の円墳が6基確認されました。一墳丘内に2基の木棺を埋葬した葬法が確認されました(京田辺市教育委員会)。

木津川市**椿井大塚山古墳**から出土した三角縁神獣鏡の欠損部分が、京都府立山城郷土資料館が 収蔵する鏡片であることが、奈良県立橿原考古学研究所の3次元形状計測により判明しました(府 立山城郷土資料館)。

八幡市**女谷・荒坂横穴群**では、古墳時代後期から奈良時代前半にかけての横穴が20基確認されました。二上山の凝灰岩製組合式石棺をはじめ、19体の人骨を検出するなど府内で最大規模の横穴群の利用時期や副葬品など、新たな考古学的な所見が得られました。特に、今回の発掘調査で



写真4 八幡市女谷・荒坂横穴群遠景 (東から)

は、横穴群の造営時期が隣接する美濃山廃寺の造営時期まで継続された可能性が高くなりました。今後、女谷・荒坂横穴群の造墓集団と美濃山廃寺の造営集団が同一集団であるか否かを検討する際の重要な調査成果となります(当センター)。

木津川市国史跡**浄瑠璃寺**の浄 土式の庭園 (特別名勝および史 跡浄瑠璃寺庭園) において平安 時代末期の石組みや鎌倉時代後 期の州浜跡が検出されました。浄瑠璃寺の造営時期などの基礎資料を得ることができました(木津川市教育委員会)。

木津川市国史跡**恭仁宮跡**において高官が執務した官庁である朝堂の建物跡が検出されました。 平城宮などで確認されている朝堂の平面プランは南北に長い長方形ですが、今回、確認された建 物跡は方形に近く、明らかに構造が異なる建物跡です。同一建物跡であるのか別の施設が近接し て築造されているのかなど、究明すべき点も多く、今後の周辺域での調査が待たれます(京都府 教育委員会)。

宇治市国宝平等院鳳凰堂の修理で52,049枚の瓦のうち、約1,500枚が平安時代後期の瓦であることがわかりました。平等院では、今までの調査により、現況とは異なった景観を有していたことがわかっています(宇治市教育委員会)。

宇治川河川改修事業に伴い、平等院と塔ノ島間の河道の調査を行いましたが、明確な遺構は検出されませんでした。なお、宇治川から船を降りて、「釣殿」と呼ばれる建物から本堂に至ったと考えられており、次年度の調査では、釣殿に隣接する調査を行う予定にしています(当センター)。

平安時代末期の関白、藤原基房の別邸である宇治市**松殿跡**で、邸宅を囲っていた土塀状の高まりが調査され、土塁であることが確認されました。同時期の区画施設としては、一般的に築地塀が多くみられるなか、土塁での囲繞は希有な事例です(宇治市教育委員会)。

井手町と城陽市境に位置する茶臼塚古墳が、石室全長12mを測る横穴式石室であることが判明 しました。横穴式石室の残存状況は、決して良好とは言えませんが、南山城地域では、最大級の



写真5 京都市聚楽第跡石垣SW105検出状況(南西から)

横穴式石室であることが確認できました。城陽市を中心に久津川古墳群が所在しますが、同古墳群には横穴式石室が墓制として採用されていないことがわかっています。同古墳群の南方に所在する冑山古墳群などでは横穴式石室が確認されており、それらの墓制が相違する要因を考えるうえで、重要な調査成果となりました(井手町教育委員会・城陽市教育委員会)。

井手町**井手寺跡**で、寺域の東辺を区画する築地塀外側の雨落溝が確認されました。今後、伽藍配置などを考えていくうえでの基礎資料が得られました(井手町教育委員会)。

京田辺市門田遺跡では、平安時代末期から室町時代の集落跡を確認しました。木津川の氾濫を避けるように居住域を丘陵部へと移したことがわかりました。発掘調査では多量の土師器や瓦器、瓦質土器とともに、滑石製石鍋や輸入陶磁器などが出土しています。なお、1596年に起こった慶長伏見地震の液状化に伴う噴砂も多数検出されました。この地震による被害が広域に及んでいることが集落跡の調査でわかってきています(当センター)。

平成19年度に確認された宇治市宇治川太閤堤跡を史跡公園化するための3次元データおよびシリコン樹脂による型取りを行うため再び発掘調査が実施されました。なお、河川の水流を制御する目的で築かれた水制の長さが約11m、幅約15mであることがわかりました(宇治市教育委員会)。

豊臣秀吉が自らの権勢を誇示するために平安宮跡の内裏近くに築造した**聚楽第跡**において、本 丸石垣の基底石から3段程度が初めて確認されました。自然石を用いており、石垣勾配は55°を 測ることがわかりました。また、地山である「聚楽土」と石垣の間には、栗石を充填しているこ とがわかりました。今回の調査までの小規模調査や立会調査のデータから聚楽第の構造的復原が 想定されてきましたが、本丸石垣の発見により、今後、さらに聚楽第の実態解明に期待が寄せら れています。なお、関係者のご理解とご協力により、石垣遺構の埋め戻しが行われ、現地に保存 されることになりました(当センター)。

木津川市**鹿背山城跡**において、「薬研堀」と呼ばれる堀切が確認されました。今回、確認した 堀切は、城主松永久秀が居城した時期の遺構としては初めてのものです(木津川市教育委員会)。

八幡市木津川河床遺跡において、明治政府が招聘したオランダ人技師ヨハネス・デ・レイケの



写真6 京都市木津川河床遺跡 E 区 S X 10 (北西から)

指揮による護岸施設と水制が、 初めて確認されました。この水 制は、桂川に突起状に張り出し ており、蒸気船が淀川河口から 伏見まで運行できるようにする ために、水流を河川の中央に流 すことによって航路の埋没を回 避するために淀川の広い範囲で 施行されたことが設計図や実測 図などから把握されていまし た。明治時代以降、河川の幅を 拡張する際、多くの水制が撤去されました。発掘調査でその構造が明らかになったのは初めてです。当該遺構は、近代化遺産として非常に重要であることから、遺構保護のため埋め戻され、現地に保存されることになりました(当センター)。

八幡市美濃山瓦窯跡の発掘 調査で、1基の窖窯と3基の 平窯の調査を行いました。2 号窯は、窯体の改築にあたり、 焼成室奥壁を壊して新たな焼 成室を造り替えたもので、少 なくとも、2回改築されてい ることがわかりました。また、 ほぼ同一規格で築造された4・ 5号窯は、2基がセットとなっ



写真7 八幡市美濃山5号窯全景(東から)

て営まれていた可能性があります(当センター)。

〈文化財保護とその周辺〉

向日市文化資料館開館20周年記念事業の一環として、図録『向日丘陵の前期古墳』掲載写真を 刷新のうえ増刷されました(向日市文化資料館)。

「宇治発掘1万年の旅」が、同市歴史資料館で開催されました。市内出土の埴輪などが一堂に 展示されました(宇治市歴史資料館)。

京都府立山城郷土資料館では、古事記編纂 1,300 年を記念して「古事記・日本書紀とやましろ」展が開催され、シンポジウムも開催されました(京都府立山城郷土資料館)。

京都府立丹後郷土資料館では、京都府文化財に新規登録された「北丹後地震写真ガラス乾板」の写真42点をパネルにした「丹後震災記録写真展」が開催されました(京都府立丹後郷土資料館)。

京丹後市古代の里資料館が9月1日にリニューアルオープンしました。「丹後建国1300年」を 来年に控え、丹後地域全体の歴史が学習できる施設として、今後、広く活用されます(京丹後市 古代の里資料館)。

綾部市資料館で開館20周年記念特別展覧会「王者の証し」が開催されました。また、それにあ わせて記念講演会も開催されました(綾部市資料館)。 国登録有形文化財である舞鶴市神崎ホフマン式輪窯(煉瓦窯)の修復作業が開始されました。明 治30年煉瓦製造会社竹村製窯所の登り窯をドイツ人技師ホフマンが大量生産可能な窯に増改築し ました(舞鶴文化教育財団)。

国内最古の歴史書である『古事記』編纂1,300年を記念する事業が各地で開催されるなか、「大 出雲展」が京都国立博物館で開催され、連日、多くの見学者がありました(京都国立博物館)。

8月上旬の豪雨により宇治市平等院の特別名勝の庭園や国史跡石清水八幡宮境内の斜面が崩落するなどの被害が各地に相次ぎました。

木津川市に所在する恭仁京跡について左京、右京を分離する足利健亮復原案に対して、両京域 を連接する復原案が、「木津の文化財と緑を守る会」代表である岩井照芳氏より提言されました。

八幡市石清水八幡宮の神仏習合を今に伝える史跡松花堂およびその跡の八角堂の修復整備が本格的に同市教育委員会によって進められることとなりました(八幡市教育委員会)。

長岡京市史跡恵解山古墳の整備事業がすすむなか、8月26日(土)に「京都の古墳文化 北の王国 南の王国」と題する講演会が開催され、多くの方々の参加がありました(長岡京市教育委員会)。

京都市西京区に所在する大枝山古墳群を含む桂坂古墳公園が一般公開されることとなりました (桂坂古墳の森保存会)。

向日市埋蔵文化財センターは、国登録有形文化財である中小路住宅の座敷を会場に古代史や考 古学の講座を開催しました。(向日市埋蔵文化財センター)。

長岡京研究の第一人者である中山修一記念館開館10周年記念シンポジウムが長岡京市中央公民館で行われ、先生の業績とお人柄を偲びました。

向日市では市内の史跡をめぐるスタンプラリー「大発見 向日市」が開催されました。約800 人の参加者が16か所のラリーポイントを回り、市内の遺跡の重要性に想いを馳せました。

京都府埋蔵文化財研究会が約100名の出席のもと、京都市ブロックが中核となり古代寺院をテーマに実施されました。今まで蓄積された調査データをまとめ、改めて律令国家のなかで寺院を捉え直す必要性を参加者が痛感した研究会でした。

京の伝統産業である伏見人形の土型から復原作成された伏見人形とともに、出土した人形を同時に展示する「伏見人形」展が、京都市考古資料館で開催されました(京都市考古資料館)。

(こいけ・ひろし=当調査研究センター調査課課長補佐)

女谷・荒坂横穴群第13次の発掘調査

奈良康正

1. はじめに

女谷・荒坂横穴群は、八幡市美濃山に位置する丘陵に造られた古墳時代後期から飛鳥時代にかけての横穴である。今回の調査は、新名神高速道路整備事業に先立ち実施した。調査地点は八幡市美濃山御毛通地内に所在し、現況は竹林であった。現地での発掘調査は平成24年4月24日に着手し、平成25年2月27日に終了した。調査面積は2,150㎡である。

女谷・荒坂横穴群が所在する丘陵周辺には、多くの横穴群が築造されている。八幡市域には、 府指定史跡である狐谷横穴群や、美濃山横穴群が、さらに京田辺市域には、松井横穴群、そして、 少し南へと距離を隔てるが、堀切谷横穴群等が存在する。

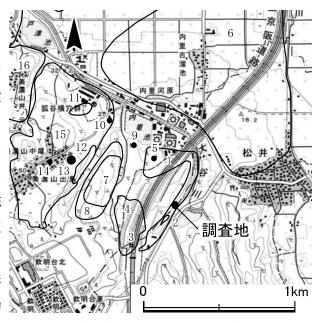
当調査研究センターでは、女谷・荒坂横穴群において、12次にわたって発掘調査を実施している。第 $1\sim9$ 次調査は、平成 $11\sim14$ 年度にかけて、第二京阪道路の建設に伴って実施しており、その際には52基の横穴が調査された。これまで実態が不明であった当横穴群での初めての本格的な調査であり、府内でも最大級の横穴群であることが判明した。また、第 $10\sim12$ 次調査は、平成 $20\sim22$ 年度に新名神高速道路整備事業に先立ち実施しており、古墳時代末から飛鳥時代に構築された8基の横穴を調査した。その際には、9世紀頃に再利用された状況を確認している。

2. 調査成果

今回の調査は、南東向きの丘陵斜面において実施した。調査着手前から、2基の横穴が開口していることが確認できていた。竹林伐採後、遺構精査を進めた結果、新たに19基の横穴を検出し、合計21基を確認した。このうち20基について発掘調査を実施し、15基については、玄室および羨道の天井部が良好に残存していることが判明した。

横穴は、おおむね標高37~40mの間に構築されており、近接する場合には、計画的に墓道に高低差を設け、互いが影響しないように配置されていた。

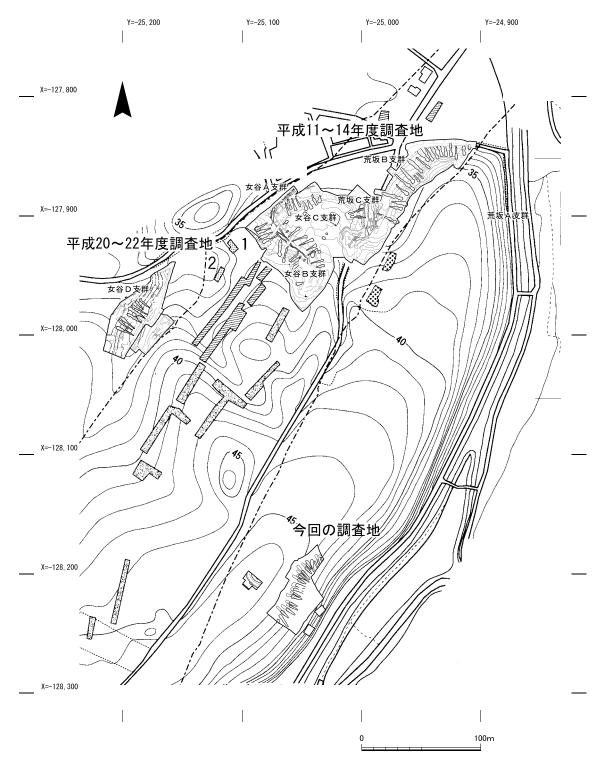
玄室には、長さが3.0mを超え、4.0mにせまる大型のものと、2.0mに満たない小型の二種が存在し、大型の玄室の中には袖部を



- 1 女谷・荒坂横穴群
- 2 御毛通遺跡 3 御毛通古墳
- 4 荒坂遺跡
- 4 元级退购
- 5 荒坂古墳
- 6 新田遺跡 7 美濃山廃寺
- 8 美濃山廃寺下層遺跡
- 9 内里池南古墳
- 10 柿谷古墳
- 11 狐谷横穴群
- 12 美濃山横穴群
- 13 王塚古墳
- 14 小塚古墳
- 15 美濃山遺跡
- 16 金右衛門垣内遺跡

第1図 調査地点位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

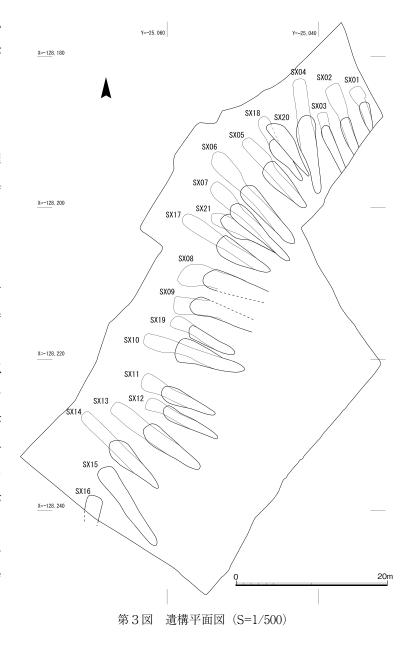
意識した例も見受けられた。今回の調査で検出した横穴で、最大となるのはS X 06 である。墓道の先端が調査区外へと延びていくため全容は不明であるが、検出した範囲では全長15.6 m以上、玄室の長さは3.9 m、幅は2.2 2.3 m、墓道・羨道の長さは11.7 m以上、幅は0.5 1.2 mをそれぞれ測る。一方、最小となるのはS X 19 である。全長8.9 m、玄室の長さは1.9 m、幅は1.5 2.0 m、墓道・羨道の長さは1.9 m、幅は1.5 2.0 m、墓道・羨道の長さは1.9 m、幅は1.5 2.0 m、墓道・羨道の長さは1.9 m、幅は1.5 2.0 m、墓道・羨道の長さは1.9 m、幅は1.5 2.0 m、墓道・



第2図 調査地位置図 (S=1/3,200)

ていなかった。だが、わずかに奥壁の状態から掘削状況が類推でき、奥壁を直立させ、天井部をテント状に三角形に掘削するものと、丸くドーム状に掘削するものの二種が確認できた。また、SX02・04では、奥壁に幅0.3m程を測る棚を削り出していた。

玄室・羨道の堆積状況から、 複数回の埋葬がなされたと考 えられ、出土した遺物にも時 期差が認められることが確認 された。多くの横穴では人骨 が遺存しており、20体余りが 出土したが、残存状況は良好 とは言えなかった。埋葬時の 姿勢を保つと考えられる例も確認で もたと判断される例も確認で きた。閉塞に関しては、いたものと考えられる。



玄室内からは、埋葬に伴う須恵器、土師器、鉄製品等が出土しており、SX15からは、玄室の 最奥部において、追葬に伴うと考えられる8世紀前半の土器が出土した。

S X17では、玄室の奥に組み合わせ式石棺が据えられていた。蓋石・底石はそれぞれ3枚で構成され、全長1.3m、幅0.99m、高さ0.42m程と小型であった。蓋石、底石には石材を組み合わせるために、溝が切られていたが側石と整合せず、どこかの古墳で使用されたものを再利用したものと考えられる。内部には、人骨がわずかに残存していた。

S X 19からは、鉄釘が多数出土した。多くは先端を内側に向けており、配列が長方形となることから、木棺が据えられていた証と考えられる。

丘陵頂部において、古墳を1基検出した。墳丘および埋葬施設は削平を受け残存していなかったが、周溝を検出した。橋脚の施工により、影響を受ける地点に限った調査であったため、全周の1/6程度を検出したのみであるが、直径がおよそ28mを測る円墳である。検出幅は4.0~4.5m、



写真1 SX15遺物出土状況

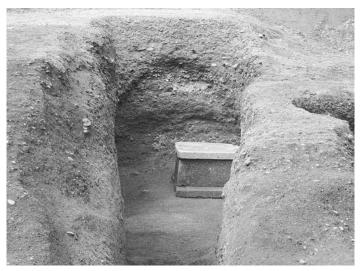


写真2 SX17石棺検出状況(東から)

残存深は0.5m程を測る。内部からは 家形・水鳥形等の形象埴輪が出土し た。

丘陵裾部においても調査区を2か 所設定し調査を行ったが、河川に向 かって傾斜する地形を確認したのみ で、遺構は検出されず、遺物も出土 しなかった。

3. おわりに

今回の発掘調査では、21基の横穴を検出し、この内20基の調査を実施した。15基の横穴では、玄室及び羨道の天井部が崩落せずに残存しており、多くの情報を得ることができた。 隣接する横穴の高低差は、構築の時期差に由来すると考えられ、おおむね新しい横穴が標高を高くし、規模も小型化していく傾向が看取された。

S X15からは、8世紀前半に属する須恵器が出土している。出土状況

を検討した結果、横穴が本来の機能を有していた時期の埋葬に伴うと判断され、奈良時代前半においても埋葬施設として機能していたと考えられる。女谷・荒坂横穴群のこれまでの調査では、古墳時代後期に構築が開始され、飛鳥時代には墓としての利用は終了すると考えられていたが、今回の調査成果から、奈良時代前半まで横穴として利用され続けていたことが判明した。

S X 17で出土した石棺は、南山城地域で横穴から出土した例としては、京田辺市堀切谷横穴 6 号に次ぐ 2 例目であり、当横穴群では、これまでに80基の横穴を調査しているが、石棺の出土は初例となる。また、丘陵頂部では円墳を 1 基検出した。墳丘及び埋葬施設については削平により失われていたが、周溝内からは良好な形象埴輪が出土しており、古墳時代中期に属すると考えられる。過去の調査においても広範に埴輪片が出土しており、今回の調査でも遺構精査の段階で少なからず埴輪片が出土していることから、丘陵頂部には、かつて複数基の古墳が築造されていた可能性が高く、今回はその 1 基を検出したものと考えられる。

(なら・やすまさ=当調査研究センター調査課調査第3係主任調査員)

聚楽第跡の発掘調査

岩松 保

1. はじめに

今回の調査は京都府警察本部の依頼により実施したもので、西陣待機宿舎の建設に伴う調査である。現地調査期間は平成24年5月25日~12月27日で、調査面積は1,330㎡である。調査地は京都市上京区上長者町通裏門東入須浜町にあり、平安京の条坊復原によると平安宮の北東部、「梨本」と記されたか所にあたり、安土桃山時代の聚楽第があった場所である。

梨本院についてはよく分かっていないが、聚楽第は関白豊臣秀吉が京都の公邸として天正14 (1586)年に構えた邸宅である。今回の調査対象地は、従来の聚楽第研究によると、本丸南辺付近にあたり、敷地の南境界付近には本丸を囲う濠が位置していることと推定された。

2. 聚楽第の歴史

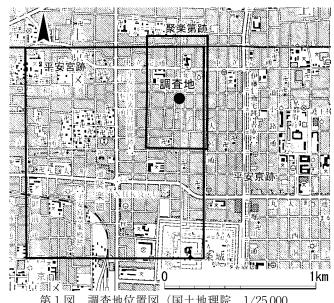
天正10(1582)年に織田信長が明智光秀に本能寺で討たれ、羽柴秀吉は山崎の合戦で光秀を倒した。秀吉は翌年に柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで倒し、信長の後継者の地位を確かなものとしていく。

秀吉は、天正13 (1585) 年7月に関白に就任し、京都での政庁・居城として聚楽第を建造した。 聚楽第は、関白秀吉の権威を誇示するために豪華絢爛に造られた城郭で、近隣には大名屋敷が整備され、天正15 (1587) 年に完成した。翌年4月には後陽成天皇を聚楽第に迎え、後陽成天皇の前で傘下の諸大名・武将に朝廷へ尊崇を尽くすべき旨を諭しつつ、秀吉への臣従を誓わせた。

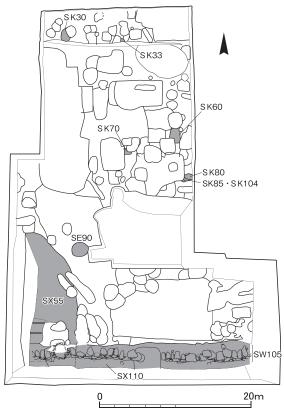
天正18(1590)年に秀吉は天下を統一し、翌年、養子の秀次に関白の地位と聚楽第を譲るが、文

禄2(1593)年に淀殿が秀頼を産むと、秀吉と秀次の関係が悪化する。文禄4(1595)年に秀次は7月に高野山で自殺に追い込まれる。翌月に秀吉の命により、「一字も残さず、基礎にいたるまで悉く毀たしめ」(ジアン・クラセ『日本西教史』)と、聚楽第は徹底的に破壊され、建物の多くは伏見城や各寺院に移された。

破却後の聚楽第跡は短期間で空き地となり、寛永年間の後半になると民家で埋まるようになる。しかし、近年においても豪跡が凹みとして観察できるなど、聚楽第の造作が周辺地形に残っている。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都市東北部、京都市西北部、京都市東南部、京都市西南部)



第2図 聚楽第跡検出遺構平面図

3. 検出した遺構 (第2図)

調査地全面で多数の土坑を検出したが、大部 分は近世以降の聚楽土採掘土坑や井戸であり、 安土桃山時代以前の遺構は僅かである。

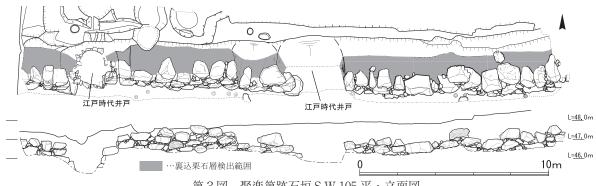
平安時代の遺構は検出できなかったが、遺物 は出土しているので、後世の改変のために遺構 は壊されたと推定される。鎌倉~室町時代の遺 構には、13世紀後半の土坑SK33、14世紀代の 土坑 S K 85、15世紀代の土坑 S K 104がある。戦 国時代の遺構には、土坑SK30・60・70・80お よび井戸SE90がある。

安土桃山時代の遺構には造成層SX55、盛土 S X 100、石垣 S W 105、本丸南堀 S X 110がある。

造成層SX55 トレンチ南西部で検出した。 造成層SX55の北部で急激な段差となっており、 約2mの高低差がある。SX55は、この段差の 斜面と下段の平坦面を埋める形で検出した。南

北約10.0m、東西5.5mの範囲で検出した。

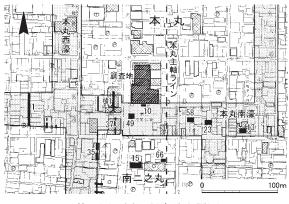
石垣SW105 聚楽第本丸南辺の石垣で、現地表下約3.0~3.5mで、東西約32m検出した。東 端部は、石積みの延長を確認した直後に安全のために埋め戻しており、記録できた範囲は約30m 分である。石垣は現存高は最大1.5mで4段の積み石を確認した。確実な基底石は確認できなか ったが、断面の観察により基底石に近い位置のものと判断する。石積み南面の平均傾斜は55.4° である。築石は西から東へ徐々に大型化している。最も多い石材は幅0.5~1.0m、奥行1.0m前後 であるが、東部の石材には、幅1.0~1.5m、奥行1m以上のものがあり、この時期の城郭として は極めて大型の石材である。表面が風化し、形状が丸みを帯びる。また、石材には矢穴や刻印、 墨書が存在せず、一部の石材のはつり痕以外には明瞭な加工痕跡が認められない。これらのこと から、山中や河原の転石を使用したものと考えられる。また、転用石材の使用も確認できなかっ



第3回 聚楽第跡石垣SW105平·立面図

た。裏込の栗石には径5~15cm大の礫を用いており、他の城郭石垣のものと較べると小ぶりである。

堀SX110 石垣SW105に面する聚楽第本 丸南堀で、北端部の幅1m程度を検出した。埋 土には、金箔瓦を含む多量の礫が堆積していた。 この礫は、大きさ・形状から、裏込の栗石と判 断される。また、石垣検出時に石材の上部を覆 うように栗石が堆積していた。これらのことか



第4図 周辺調査地配置図

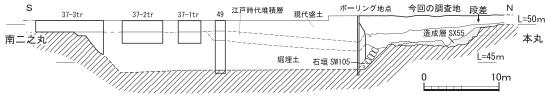
ら、石垣の背後に詰められていた栗石が、石材を抜き取った際に堀SX110内に崩れたと想定され、 聚楽第破却時に堀SX110は部分的に埋められたものと推測される。

4. 石垣の復原

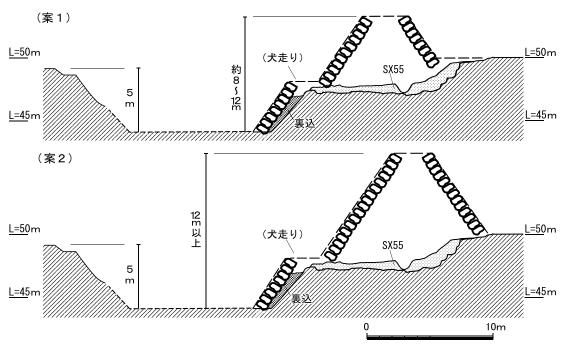
今回の調査地の周辺では、南隣の辰巳児童公園内の第10地点、第49地点で本丸南堀が確認されている(第4図)。また、智恵光院通をはさんで西に近接する第37・41地点では、本丸南堀の南北肩が検出されており、幅43.5mであることが判明している。これらの知見を基に堀底と当時の地表面を復原したのが第5図である。石垣SW105の残存高は確認できたのは1.5mであるが、最大で4mとなる。この図を基に、本来の石垣の高さと位置とを検討したい。

石垣の高さは、一つは現状の石垣の高さに近い標高47m付近の平坦面(調査地南半の造成層S X55下面あたりの平坦地)まで、二つは造成層S X55が斜面に貼り付いている標高50mの平坦面 (調査地北半の平坦地)の高さにまで構築されていた可能性がある。しかしこれらの想定では、南堀対岸と聚楽第本丸とが同じ高さとなり、南二之丸から石垣や聚楽第本丸を見下ろすこととなる。こういった聚楽第のレイアウトでは、関白秀吉の威信を示すという点で、やや説得力に欠ける。

視覚による威信という点を勘案すると、聚楽第の石垣は第6図に示した2案が現実的である。 案1は、段差の北側、造成層SX55の盛土中に土塁本体が構築されているもので、案2は造成層 SX55すべてが石垣本体の中に位置するものである。案1では、堀底から石垣頂部までの高さは 約8~12mとなり、本丸内の平坦面からは数mの高低差がある。案2は、石垣が一層高くなるも ので、堀底から頂部までの高低差は12m以上となり、本丸内平坦面から6m以上の高低差となる。 この時期もしくは以前の石垣は、小牧城や岐阜城、旧二条城、大坂城など、二・三段に石垣を積 むものが多く、石垣が浅い勾配であることも含めて、技術的に高く積むことができなかったので



第5図 聚楽第跡南堀および本丸・南二之丸断面図



第6図 聚楽第石垣復原図

あろう。平城で10m以上の高い石垣を構築する技術が未発達であったとしても、複数段に石垣を 分けることにより、高い石垣を構築することは可能である。聚楽第本丸東堀も二段に掘られてお り、これらの考えと矛盾しないものである。

5. まとめ

秀吉が大坂城、聚楽第を築造して以後、各地の城郭に石垣が多用されるようになる。今回の聚 楽第の石垣の発見は、日本における発展期の石垣として重要である。

今回の調査では、初めて本丸南辺石垣を検出し、聚楽第の遺構が地中深くに遺存している場合があることが判明した。当時の石垣が地中にパックされていることは、まさに後世の手が加えられずに、当時のままに出土したということである。

また、聚楽第は徹底的に破却されたと文献に記されているが、その実態は不明であった。第6 図の復原案を参照すると、今回検出した石垣はほぼ下段分に相当し、全体の1/3~1/4しか残っておらず、ほとんどの石が抜き取られていることとなり、破却の様相の一端が明らかとなった。巨石を積み上げていることや転用石を用いていないことは、秀吉の権勢を覗わせるものである。

今回検出した石垣SW105は、聚楽第研究の成果によると、本丸主軸線上のやや西側に位置する(第4図)。築石が東へ向かうにつれて大型化することは、今回の調査地の東側に重要な施設が存在したことを推測せしめる。入り口付近の石垣に特に大型の石材を選別して秀吉の権威を示したすると、今回の調査地のすぐ東側に本丸への入り口が存在した可能性がある。

(いわまつ・たもつ=当調査研究センター調査課調査第2係長)

平成 24 年度発掘調査略報

11.植物園北遺跡

所 在 地 京都市左京区下鴨半木町

調査期間 平成24年4月6日~平成25年3月8日

調査面積 6,000 m²

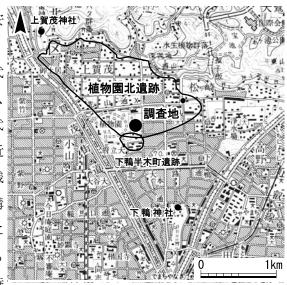
はじめに 今回の発掘調査は、新総合資料館(仮称)・教養教育共同化施設(仮称)整備事業に先立ち実施した。調査は、平成23年度(1区・2区:計2,200㎡)に引き続き実施したもので、23年度の調査では、主に奈良時代の竪穴建物や奈良~平安時代の掘立柱建物群を確認した。24年度の調査は、京都府公立大学法人京都府立大学の構内および付属農場を対象とし、農場内に3~7区(5,605㎡)を、また大学構内に8・9区(395㎡)を設定し、全体で6,000㎡の調査を実施した。

調査概要 今回の発掘調査では、古墳時代から近世までの各時期の遺構を確認した。検出した おもな遺構は、古墳時代後期の竪穴建物1基、奈良~平安時代の竪穴建物10基、奈良~平安時代 の掘立柱建物30棟、柱列や土坑等のほか、鎌倉時代~江戸時代の掘立柱建物2棟や土坑や溝など の多数の遺構や自然流路を検出した。以下、各区の概要を述べる。

3区 奈良~平安時代の竪穴建物、掘立柱建物、溝群のほか、柵列とみられる柱列や土坑等を 検出した。平安時代の溝のうち1条は、(財)京都市埋蔵文化財研究所による3区の北約100mの 地点で検出された平成3年度調査区の溝と同一の溝と推定される。また、竪穴建物のうちの1基 は、竈をもつ奈良時代後期の建物であることが判明した。

時代前期の建物と推定される。

5・6区 古墳時代後期の竪穴建物や奈良時代 ~平安時代前期の竪穴建物および掘立柱建物群、江戸時代の建物や自然流路を検出した。江戸時代 の流路は、幅約6~7mの規模をもつもので、近世の上賀茂村と下鴨村の境界とされた絵図に残る乙井川と推定される。奈良~平安時代の遺構は、竪穴建物や掘立柱建物群のほか、南北方向に掘削された溝や土坑がある。竪穴建物はいずれも 奈良時代と推定され、掘立柱建物は奈良~平安時



調查地位置図

代前期に帰属する。また、調査区の中央東寄りで (国土地理院 1/50,000 『京都東北部』に一部改編)

は、今回の調査で最も規模の大きな建物跡である三面廂建物 S B 5130を検出した。 S B 5130は、東西 5 間×南北 2 間の規模の身舎をもち、南と東西に廂を配する建物 (東西16.8m×南北8.5m)である。身舎の柱間は約2.1~2.2m、廂の柱間は約2.4~2.5mを測り、それぞれ7尺と8尺を基準としたとみられる。建物の主軸は北から東に3°振る。柱穴の埋土から緑釉陶器や灰釉陶器が出土しており、9世紀後半の建物とみられる。また、この建物の南側に約15m離れて、平行する柱列を検出した。三面廂建物と関連する遺構の可能性がある。古墳時代の遺構は、6区で竪穴建物1基を検出し、出土土器から6世紀後葉の建物であることが判明した。

7区 奈良~平安時代の竈をもつ竪穴建物や、掘立柱建物のほか、多量の土器片を出土する廃棄土坑とみられる遺構を検出した。須恵器や土師器のほか、緑釉陶器などの施釉陶器が出土した。

8・9区 8・9区は府立大学構内に設定した調査区である。7区の南西約100mの地点に8区を設定し、8区の南西約100mに9区を設定した。8区では、北西から南東へ流れる自然流路を確認した。流路から土師器や瓦器片が出土しており、中世の流路と推定される。また、9区でも北西から南東へ流れる近世とみられる自然流路を確認した。

まとめ 検出した遺構の主な時期は、奈良~平安時代前期(8~9世紀)を中心とする。なかで も平安時代前期の建物群は、建物方位を北に向けて揃え、規格性をもつことが判明した。調査区

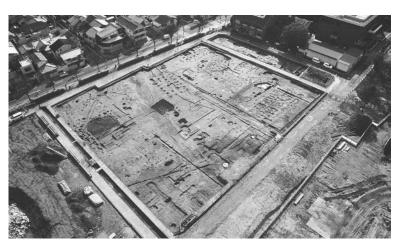


写真1 調査区全景 5~7区(北西から)



写真2 三面廂建物SB5130(南から)

内では、全体に、整然と倉庫 を配したり、官衙的な建物配 置は確認されないことから、 居住域であったと推定され る。また、5区南部で検出し た9世紀後半と推定される三 面廂建物 S B5130は、平安京 の京域外で初めて確認された 三面廂建物として注目され る。調査地は平安時代に崇敬 を集めた上賀茂社と下鴨社が 所在する中間地域にあり、一 帯が平安時代前期に大きく開 発されたことが判明した。今 回の調査は、平安京の京域外 において、平安京造営前後に おける集落の構造と開発の在 り方を知ることのできる貴重 な資料となった。

(高野陽子)

所 在 地 城陽市寺田·水主

調查期間 下水主遺跡(第1次):平成24年5月21日~平成25年3月7日

水主神社東遺跡 (第2次): 平成24年4月23日~平成24年6月28日

調查面積 下水主遺跡(第1次):3,360㎡、水主神社東遺跡(第2次):630㎡

はじめに 今回の調査は新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。

京奈和自動車道城陽インターチェンジの西側に下水主遺跡、東側に水主神社東遺跡が位置する。 両遺跡は、木津川右岸に立地する弥生時代から近世までの遺物を含む包蔵地である。

調査概要 下水主遺跡で5か所(B・C・CA1・BP8・BP9)、水主神社東遺跡で2か所 (第1トレンチ・第2トレンチ)を設定し、遺構および遺物の確認を行った。

下水主遺跡の調査地の大半は木津川によって形成された沖積平野で、標高は調査地南端で16.3 m、北端で15.8 mと緩やかに北に向かって低くなっている。いずれの調査区でも中世の島畑が確認でき、島畑上面では中世以降の南北方向の耕作溝を確認したが、BP8地区では東西方向の耕作溝を検出した。また、B地区とBP地区では中世以前の堆積が確認でき、B地区では谷地形(NR22)で弥生時代から古墳時代にかけての遺物を確認した。BP地区では調査区南側島畑から調査区南辺に伸び、古墳時代の遺物を含む溝状の落ち込みを確認し、さらに島畑下層では縄文時代の遺物を含む土坑状遺構を確認した。

水主神社東遺跡では、第1・2トレンチともに中世の島畑を確認した。また、島畑上では南北方向の耕作溝を確認した。とくに第2トレンチでは、近世以降の用水路と考えられる溝2条を確認し、それが中世の島畑の周囲をめぐる溝の位置を踏襲して造られていることが判明した。遺物はほとんど出土していない。

まとめ 下水主遺跡と水主神社東遺跡では、すべての調査区で島畑や耕作溝を確認した。

また、下水主遺跡のB地区とBP地区では、中世以前の遺構・遺物を確認したことか



第1図 調査地位置図 (国土地理院 1/25,000 宇治)

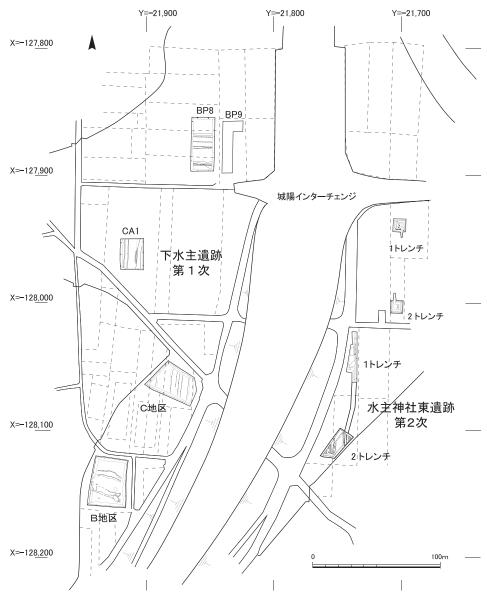


写真 水主神社東遺跡第2次 2トレンチ島畑近景(北東から)

ら、下水主遺跡周辺では幅広い時期の遺構が、広 範囲に広がる可能性が高いことが判明した。

水主神社東遺跡第2トレンチで確認したように 中世の流路の位置が近現代で踏襲されているか所 もあることが判明し、長期間にわたって耕作地と して利用され続けていたことが判明した。

(戸原和人・関広尚世)



第2図 調査トレンチ配置図 下水主遺跡・水主神社東遺跡調査区配置図

13.下水主遺跡第2次· 水主遺跡第2次· 水主神社東遺跡第3次

所 在 地 城陽市寺田今橋·金尾

調査期間 平成24年9月24日~平成25年3月8日

調査面積 9,100㎡(内A北地区:500㎡、D地区:2,800㎡は表土除去のみ)

はじめに この調査は、一般国道24号金尾交差点改良工事に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。

下水主遺跡・水主神社東遺跡は木津川右岸の沖積地に広範囲に広がる遺跡で、縄文時代~中・ 近世の土器などの散布地として知られている。また明治・大正時代には、広範囲に島畑で果樹栽 培等が行われている。

調査概要 調査は、道路予定地内にA~Eの調査区を設定し実施した。このうち、A~C地区が下水主遺跡、D·E地区が水主神社東遺跡に該当する。A北・D地区については、平成25年度の調査に向けて土砂除去作業のみ行った。

A地区 東西方向の島畑の東端2か所と西端1か所を検出した。

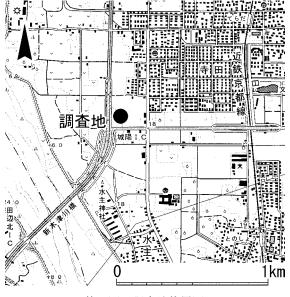
B地区 トレンチ中央部で南北方向に直列して並ぶ島畑2か所、その西側で南北方向の島畑の東側の一部の3か所を検出した。島畑上には南北・東西方向の島畑に伴う溝が認められた。北側の島畑北端付近では、弥生時代後期に属する土坑・溝を検出した。このほか、島畑を形成する微高地の堆積土中からは、縄文時代後期の土器が出土している。

C地区 トレンチ中央部で南北方向の島畑1か所、これに平行して西側で島畑東側の一部、東

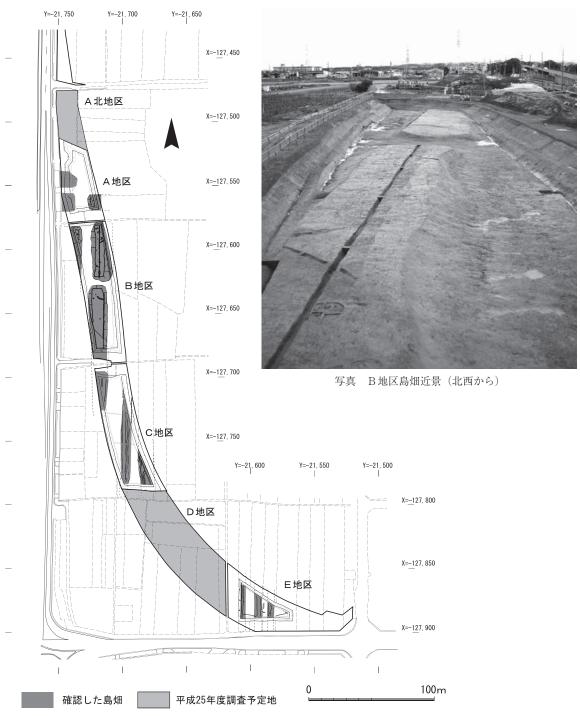
側で島畑西側の一部の3か所を検出した。中央 で検出した島畑の中央部には平行する形で溝が 検出され、3回にわたる溝の掘り直しが確認さ れた。このほか、B地区同様の微高地堆積土中 からは縄文時代の石鏃が出土している。

E地区 南北方向の島畑3か所を検出した。 西側の島畑上には、島畑に伴う南北方向の溝も 検出された。

まとめ 調査地内全域で島畑が検出され当該 地での土地利用の実態が明らかになった。島畑 上の堆積土や島畑間の溝埋土中からは縄文時代 後期~平安時代にかけての遺物が出土してお り、当該地周辺での集落の存在を示唆する。



第1図 調査地位置図 (国土地理院 1/25,000 宇治)



第2図 調査区および主要遺構配置図

出土遺物からすると13世紀前半には島畑の造成が行われ、13世紀後半~14世紀、15世紀、16世紀に大規模な島畑改変が行われ、近世以降は明治の島畑に引き継がれたようである。また、島畑の境界は城陽市西部に遺存する条里制地割の一町内(坪)に収まるように造成されていることから、島畑造成時には条里地割が施工されていたと考えられる。条里地割に認められる地割と島畑の配置が一致しないところが見受けられるが、これがどういった理由によるものかは不明である。平成25年度にA北・D地区での調査が予定されている。今後、島畑上で栽培されていたものについては、花粉分析や種子の同定作業等を実施していく予定である。 (増田孝彦)

14.松井横穴群第2次

所 在 地 京田辺市松井上西浦ほか

調査期間 平成24年6月6日~平成25年3月6日

調査面積 5,215㎡

はじめに 松井横穴群は、京田辺市松井に所在し、田辺丘陵から男山丘陵へと続く丘陵支脈斜 面に構築された横穴群である。

その存在は古くから周知されており、分布・測量調査が行われてきた。付近には西に500m離れた丘陵斜面に女谷・荒坂横穴群が展開し、さらにその北西には美濃山横穴群、狐谷横穴群が展開している。また、当遺跡内の北側には弥生時代の遺物散布地である向山遺跡が、丘陵支脈の北端部には天神社古墳群が所在している。

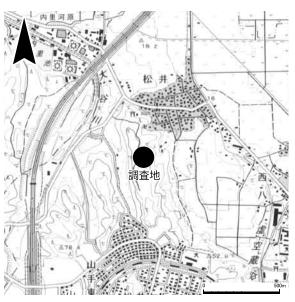
本遺跡では、新名神高速道路整備事業に伴い平成23年度に当調査研究センターが第1次調査を 行っており、横穴の埋没に伴うと判断される土色の変化と須恵器などの出土遺物を確認している。

今回は第1次調査の成果を受け、工事予定範囲内における横穴の基数確認と一部横穴内の調査を行った。なお、調査前は竹林として土地利用されていた。

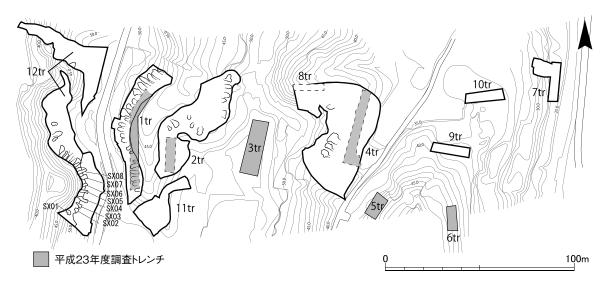
調査概要 今回の調査は、第 1 次調査 $(1 \sim 6 \land \nu)$ に続き、新たに 6 か所の調査区 $(7 \sim 12 \land \nu)$ を設定したほか、第 1 次調査で横穴の兆候がみられた $1 \cdot 2 \cdot 4 \land \nu$ を拡張して実施した。これらのうち、 $7 \cdot 9 \cdot 10 \land \nu$ では竹林の造営に伴う堆積土の直下に地山層を確認し、横穴の兆候はみられなかった。 $8 \cdot 11 \cdot 12 \land \nu$ チでは横穴の埋没に伴うと判断される土色変化や須恵器などの出土遺物が確認された。なお、 $8 \land \nu$ チャンチは $4 \land \nu$ かれ西に設定し

たが、4トレンチの拡張に伴い統合し、4トレンチとして扱うこととした。1トレンチでは23か所で横穴と思われる土色変化を確認した。2トレンチでは10か所の横穴と思われる痕跡と2か所で同様の土色変化を確認した。4トレンチでは4か所の横穴と思われる痕跡を確認したほか、5か所の土色変化を確認した。11トレンチでは4か所の土色の変化が確認されたほか、中央谷部より須恵器が出土した。12トレンチでは18か所の横穴と思われる痕跡を確認した。

今回の調査では、各トレンチでの分布状況の確認に加え、12トレンチで検出された横穴18基のうち南側 8基 (S X01 \sim 08) の調査を行った。



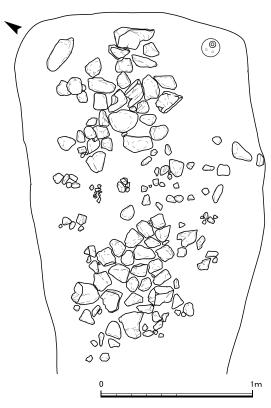
第1図 調査地位置図 (国土地理院 1/25,000 淀)



第2図 トレンチ配置図

 $SX01\sim08$ は、いずれも大きな削平を受けており、墓道部分はほとんど残っていなかった。玄室部分では天井が一部残っており、SX08では内部の空洞も確認されたが、調査の安全確保から、横断面を記録したのちに、重機にて天井部の掘削除去を行い、調査作業を続行した。SX08を除く横穴は流入土砂により完全に埋没していた。SX05とSX08では、横穴床面に礫を部分的に敷いている状況が確認された。

出土した遺物としては、土師器では杯がある。須恵器では主に杯身と杯蓋が出土したほか、高



第3図 S X 08礫敷き及び遺物 出土状況図

杯、短頸壺、平瓶、提瓶も出土した。金属製品では刀子や鉄鏃と思われる酸化鉄塊と耳環が出土した。また、S X01の流入土中から弥生土器と思われる土器底部が出土した。

まとめ 今回の調査では、調査対象地全体で66 か所の横穴と思われる痕跡および土色の変化を確 認した。

分布状況としては、横穴は西側2つの尾根斜面 に集中し、東の尾根筋では確認できなかった。

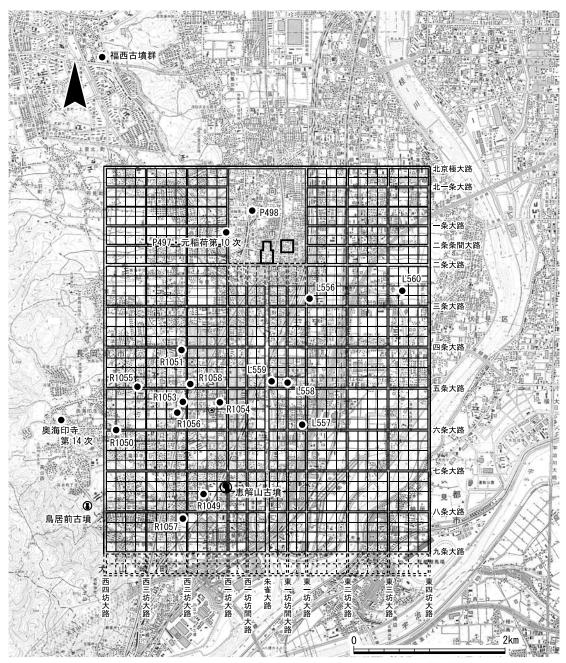
S X 05と S X 08で検出された礫敷きはあまり類をみない例と言え、周辺横穴群や古墳との関係についても検討していく必要がある。出土した遺物はおおむね6世紀末から7世紀中頃のものとみられる。

なお、当該調査地は平成25年度も引き続き調査 を行う予定である。

(大髙義寛)

長岡京跡調査だより・117

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成25年2月から5月の例会では、宮域2件、右京域11件、左京域5件、京域外3件の合計21件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財) 向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図) 調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。 宮域 元稲荷古墳第10次調査(宮第497次調査・向日市向日町)では後方部西辺の裾位置及び礫敷の広がりと、前方部南方の古墳築造に伴う「堀切り状の遺構」を確認するための調査が実施された。調査の結果、後方部西辺の裾位置と第1段斜面裾まで礫敷・葺石の遺存状況が把握され、後方部は一辺50mの規模であることが確定した。また、前方部南方の「堀切り状の遺構」の一部が検出された。出土遺物には讃岐系大型二重口縁壺や特殊器台形埴輪の破片がある。今回の調査成果から、墳丘については神戸市西求女塚古墳と「同形墳」であると考えられるに至った。

宮第556次調査(向日市上植野町)では、東一坊大路東側溝と、建物等は復元できないが複数の 柱穴が確認された。東一坊大路東側溝からは墨書土器や飛雲文軒平瓦、銅製丸鞆などが出土して いる。

右京域 右京第1050次調査(長岡京市下海印寺)では、遺構・遺物は少なく、古墳時代の須恵器 甕据え付け土坑が検出された。出土遺物には縄文・古墳・平安時代のものがある。右京第1051次 調査(長岡京市長岡)では、長岡京期の遺構は確認されず、庄内期の土坑や溝、多数の小柱穴が検出された。右京第1052次調査(大山崎町下植野)では、奈良時代の掘立柱建物等が確認された。周辺での調査例は少なく、興味深い成果である。右京第1053次調査(長岡京市天神)では、西二坊大路西側溝や宅地内溝が検出された。西二坊大路西側溝から凝灰岩の塊が、宅地内溝から長岡京期の遺物が出土している。右京第1054次調査(長岡京市開田)では、時期不明の土坑が2基確認されたのみである。右京第1055次調査(長岡京市天神)では、長岡京期およびその他の時期の遺構は確認されなかった。恵解山古墳では平成24年12月から保存・整備事業に伴う調査が実施されており、前方部東第1傾斜面葺石や前方部南東部墳丘裾部葺石、後円部第1テラス面埴輪列等が確認された。現在整備工事中である。

左京域 左京第560次調査(京都市伏見区)では、長岡京期の掘立柱建物4棟と柱列2条などが検出された。2棟の建物は中軸を揃えて南北に配置されており、その南側には宅地内道路または坪境道路と考えられる2条の溝が並走する。建物配置や道路と考えられる溝の位置から1/4町または1/2町規模の宅地と考えられている。建物の柱穴からは凝灰岩や緑釉陶器の甑が出土している。左京第599次調査(長岡京市馬場川原)では、長岡京期およびその他の時期の遺構は検出されておらず、河川堆積が確認されたのみである。

京域外 奥海印寺遺跡第14次調査(長岡京市奥海印寺)では、長岡京期及びその他の時期の遺構は検出されておらず、小泉川の流路堆積が確認された。

(松尾史子)

資料紹介

山崎津跡から出土した頭蓋骨について

佐藤勇雄・中務真人・小池寛

頭蓋骨は、6つの比較的大きな破片(右側の顔面部から側頭部(a)、左前頭部から頭頂部(b)、左蝶形骨(c)、左蝶形骨の小翼と前頭骨の一部(d)、左頭頂骨(e)、外後頭隆起から上部の後頭骨(f))と他の同定不可能な小破片とからなる。同定可能な部位について重複がないこと、全体的な大きさ、各片から推定される年齢に食い違いが認められないことから、これらは同一の頭蓋骨に属すると考えられる。埋没時に起こったと考えられる破損に加え、乾燥時に頭蓋骨の外板が収縮し、外側に反り変形していたため、破片の接合は不可能であった。

眉上隆起の発達が強い点、乳様突起の全体的な大きさから男性と判断できる。残存している歯(右上顎第一小臼歯と第一大臼歯)の咬耗が相当進行している点から、成人と判断され、矢状縫合とラムダ縫合の内板に癒合が始まった痕跡が認められないことから30代後半には達していないと推定された。

破片(a)は、右側の頭頂骨と前頭骨の一部、側頭骨、蝶形骨、頬骨、上顎骨からなる。図側面と前面を示した。側頭骨、頬骨、上顎骨の保存状態は比較的良好である。側頭骨は鱗部の外板が乾燥のため、剥離している。乳様突起の尖端部は広く緻密骨が失われ、海綿骨が露出しているが、死後の破損である。頬骨では眼窩外縁に、乾燥による亀裂が認められる。右上顎骨には第一小臼歯と第一大臼歯が残存している。左上顎骨は第一小臼歯の歯槽前縁までを残している。歯槽の存在から、右側2本以外の歯は、死後に脱落したと考えられる。頬骨、上顎骨共に大きく頑丈である。前頭骨は前頭頬骨縫合から2cm程度眼窩上縁部を残している。うち内側半分は死後の破損により、外板を失っている。前頭骨、頭頂骨共に、側頭線付近で破損している。ラムダ縫合の一部が残り、後頭骨の小片と縫合している。外傷や病変を疑わせる徴候は見当たらず、クリブラオービタリアや歯のエナメル質減形成といった失調症性疾患による徴候も見られなかった。

破片(b)は前頭骨と鼻骨からなる。図では上面を示した(図の右手が前面)。前頭面は全体の3割程度が残っているが、そのほとんどは左側で、右側の大半は破損し失われている。中央部は冠状縫合まで残しているが、外板のほとんどは剥離している。頭蓋内面の前頭陵に矢状方向の亀裂が発生したため、鼻根部は生前の状態よりも広がっている。鼻骨が強い前突を示すのは、変形した鼻根に接合したためで、元あった状態よりも前突は強調されている。前頭骨の眼窩部は左の眼窩上縁全体から右の眼窩の左の隅まで残っている。刀傷は認められず、破損は、いずれも死後に起きたと考えられる。

破片(c)は左蝶形骨大翼の一部だが、小翼や翼状突起をはじめ、トルコ鞍・斜台などは失われている。図はほぼ垂直方向に配置し前面を示した。

破片(d)は左蝶形骨の小翼部分と前頭骨の一部である。

破片(e)は左頭頂骨で、矢状縫合、冠状縫合、 ラムダ縫合(上部半分は破損)を確認すること が出来る。図の上方向が前面。

破片(f)は後頭骨上部で、上項線付近で破損 している。外板の変形、剥離が著しく、特に言 及すべき点は認められない。図は後面。上方向 が頭頂。

(さとう・いさお、なかつかさ・まひと = 京都大学大学院理化学研究科)

今回、分析をお願いした人骨は、大山崎町山崎津跡第18次調査において、中世の遺物包含層から出土した資料である。当該包含層からは多量の土師器、瓦器などの土器類とともに、木器、動物遺存体などが出土している。動物遺存体には、牛や馬の大型獣のほか、犬、猫をはじめスッポンなどの爬虫類や貝類であるアカニシの遺存体が出土している。堆積時期は、12世紀後半から13世紀前半である。

出土地点は、現在では堤防の河川側であるが、 古地図などから人為的に水流調整が行われた港

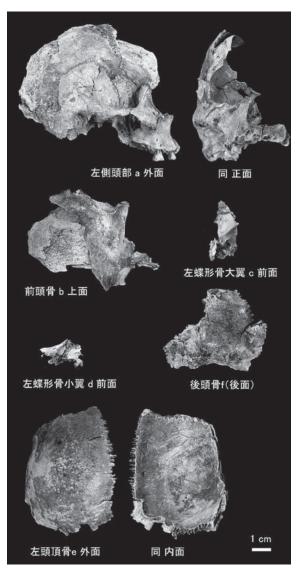


図 出土人骨写真

(津)などに隣接した居住空間内に位置すると考えられる。包含層からは完形の瓦器椀などが数多く出土していることから、居住域で生じた廃棄物を集積した部分に当たると考えられる。動物遺存体を分析された山崎健氏(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)は、街村の裏庭や隣接する河原などに家畜類や食物残滓を投棄する行為は、中世前期には一般的であったと指摘しておられる。当該人骨には、刀傷なども見られないことから、先に述べた動物遺存体とともに遺棄された可能性が高い。

(こいけ・ひろし=当調査研究センター調査課課長補佐)

〈参考文献〉

小池寛・引原茂治・高野陽子・伊賀高弘「山崎津跡第 17・18 次 (7YYMS' HY-1・S' KR-1・S' RK-21 地区)」 山崎健「自然科学的方法による分析結果 山崎津跡から出土した動物遺存体」(『京都府遺跡調査報告書』 第 155 冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013

普及啓発事業(平成25年4月~平成25年6月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史 を理解していただくため、埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業(体験学習)等の普及啓 発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第124回埋蔵文化財セミナー『今明かされる古代寺院美濃山廃寺の姿』を、5月25日(土)に八幡市文化センター小ホールで実施しました。



第124回埋蔵文化財セミナー会場内風景



第124回埋蔵文化財セミナー発表風景



第124回埋蔵文化財セミナー質疑応答

当調査研究センター筒井崇史主任調査員の「美濃山廃寺の発掘調査から古代寺院を解明」の報告は、広大な面積を調査した美濃山廃寺の全体像を俯瞰し、出土した軒瓦を主な指標として時期区分を行い、遺構の変遷から、その特異性や造営氏族の検討を行いました。

続いて同センター引原茂治主任調査員の「美 濃山瓦窯跡の成立と展開」の報告では、遺跡の 北東部で検出された瓦窯群の調査について、各 瓦窯跡の構造と特質を紹介し、主に出土瓦から その流通について検討しました。併せて窯体に 使用されていた「西寺」押印瓦を焦点に、この 瓦窯が平安時代に入ると国が関与する造瓦体制 に組み入れられたことを読み解きました。

最後に、八幡市教育委員会の小森俊寛氏の「美 濃山廃寺の歴史的位置づけー地域社会と美濃山 廃寺ー」の発表では、周辺に多数分布する横穴 墓群との関係にも触れながら、美濃山廃寺の造 営母体を周辺地域の集落や古墳との関係から検 討されるとともに、数多く出土した覆鉢形土製 品や「ひさご形土製品」を用いた小塔供養の意 義について述べられました。

当日は天候にも恵まれ、123名の参加者を得て盛況のうちに無事終了することができました。 (伊賀高弘)

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

(平成25年7月1日現在)

評 議 員	
芦田富男	
奥原恒興	
佐々木丞平	

理事長

上田正昭

常務理事

小池 久

理 事

監 事

清水浩平 岩永憲秀

事務局長 小池 久 総務課 課 長 肥後弘幸 課長補佐 杉江昌乃 総務参与 安田正人 総務係長 今村正寿 主 任 鍋田幸世 主 事 葛本慎太郎 課 長 調査課 水谷壽克 参 事 石井清司 課長補佐 小池 寛 企画調整係長 小池 寛(兼) 主任調査員 田中 彰 松尾史子 主任調査員 主查調查員 伊賀高弘 副主查 小山雅人 調査第1係長 中川和哉 主任調查員 引原茂治 主任調査員 高野陽子 主任調査員 筒井崇史 専門調査員 岡﨑研一 主查調查員 柴 暁彦 岩松 保 調査第2係長 次席総括調査員 伊野近富 竹原一彦 主任調查員 主任調查員 増田孝彦 専門調査員 黒坪一樹 主 査 石尾政信 副 查 員 綾部侑真 調査第3係長 石井清司(兼) 主任調査員 戸原和人 主任調査員 奈良康正 主任調查員 村田和弘 員 査 加藤雅士 調 査 員 福山博章 調 査 員 関広尚世 調 杳 員 大髙義寛 員 山﨑美輪 調 査 調 杳 員 岡田健吾

センターの動向

(平成25年3月~7月)

月	日	事項	
3	19	第6回理事会(於:ルビノ京都堀川)	
	29	退職職員辞令交付(安田正人、岸岡貴英、古川匠、牧田梨津子、辻本和美)	
4	1	採用職員辞令交付(肥後弘幸、福山博章、関広尚世、大髙義寛、山﨑美輪、綾部	ß
		有真、岡田健吾、安田正人、小山雅人、石尾政信)	
	22	公井横穴群(京田辺市)発掘調査開始	
		下水主遺跡(城陽市・新名神関係)発掘調査開始	
	24	石田谷遺跡(与謝野町)発掘調査開始	
		長岡京連絡協議会(於:当センター)	
	25	大川遺跡(舞鶴市)発掘調査開始	
	26	下水主遺跡(城陽市・24号関係)発掘調査開始	
5	22	長岡京連絡協議会(於:当センター)	
	25	第124回埋蔵文化財セミナー(於:八幡市文化センター)参加者123名	
	30	監事監査(補助監査:当センター)	
6	7	監事監査(監査・講評)	
	10	第7回理事会(於:ルビノ京都堀川)	
	26	平議員会(於:ルビノ京都堀川)小橋秀生監事退任、岩永憲秀監事就任	
		長岡京連絡協議会(於:当センター)	
7	6	石田谷遺跡(与謝野町)現地説明会(参加者67名)	
	8	出雲遺跡(亀岡市)発掘調査開始	
	10	中古墳群(亀岡市)発掘調査開始	
	10	舟庁 2 号館ロビー展示(~12日)	
	22	開田遺跡(長岡京市)発掘調査開始	
	24	長岡京連絡協議会(於:当センター)	
	30	万田谷遺跡発掘調査終了(4/24~)	
	31	平成25年度第1回遺跡検討会(植物園北遺跡、於:当センター)	

編集後記

平成25年度は、「観測史上初」の言葉をよく耳にするように、激しい気候変動を伴いながらスタートしました。新年度の第1号となる京都府埋蔵文化財情報第121号が完成いたしましたので、お届けします。

当調査研究センターは公益財団法人に移行してまる2年が経過し、新体制のもとに事業も順調に進捗しております。

本号では、平成24年度における京都府内の埋蔵文化財調査を概観する とともに、当該年度の調査成果でとくに注目された女谷・荒坂横穴群及び 聚楽第跡の抄報を掲載いたしました。

御味読くだされば幸いです。

(編集担当 伊賀)

京都府埋蔵文化財情報 第121号

平成 25 年 8 月 31 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141

